

発 明 文 化 論

〈第 39 回〉

丸山 亮

国家と宗教

冬晴れの午後、市原市にある上総国分寺と国分尼寺の跡を訪ねた。国分寺に創建当時の面影はないが、住職のいる真言宗の寺があって、この日は初詣の人の立てる線香の煙が境内に漂っていた。近年再建された薬師堂は趣があるけれども江戸期の建物で、国分寺を思わせるものとしては、七重の塔があった跡を示す表示ぐらいだ。

この国分寺から遠くない上総国分尼寺の跡には、中門と瓦屋根の回廊が復元されている。寺域は諸国の国分尼寺の中で最も広いといい、展示館にそれを実感させる模型がある。壮大な伽藍配置とともに、僧坊や薬草園などが周囲にあったことも分かっている。人気のない回廊を回るときうっかり太い柱に触ったら、塗られて間もないベンガラが手についた。

国分二寺の造営は、天平 13 (741) 年の聖武天皇による勅令に発した国家事業だった。律令体制が緩んだところへ内乱や疫病が襲ったことが、直接の動機といわれている。

仏教は6世紀中ごろに伝来して、すぐに国教となったわけではない。初めは渡来人を中心とした豪族の信仰にとどまり、物部氏のような廃仏の立場からの反対にもあいながら、だんだんと国の中枢に受容されていく。なかでも聖徳太子は、仏教による国家統一を目指した指導者だった。17条憲法の「篤く三宝を敬え」は有名だ。三宝とは仏、宝、僧をいう。

伝来から2世紀を経て、聖武天皇は、いよいよ仏教に基づく国家建設に乗り出した。東大寺盧舎那仏の造営と並んで、国分二寺を諸国に配する大事業だ。

国分寺には最勝王経を収めた七重の塔を、国分尼寺には法華経の経楼を建て、それぞれ鎮護国家、成仏と罪滅の象徴とする。そして寺には僧、尼僧が住んで写経や読経に励むものとされた。また薬草園などが併設されているので、一種の社会事業としての役割もあったと思われる。

こうした仏教による統一国家の指向は、直接には中国の全国官寺制に倣うものだが、さらにその先例は仏教発祥の地、インドのアショーカ王による事跡にまで遡る。古代インド、マウリア朝の王は征服戦争の勝利後、武力に代えダルマ（法）による統治を目指すようになり、仏教に入信して領内に8万を超える仏塔を建てたといわれる。ダルマは仏法そのものではないとしても、帝国の安定化に役立ったことだろう。その一環として、道路の整備や病院の建設などが行われており、後代の手本となったかもしれない。

仏塔には仏陀の遺骨、仏舍利を納めるものとされたが、伝来の過程で經典に置き代わっていく。唐代に三蔵法師がインドから持ち帰ったという經典は、長安の大雁塔に収められている。その唐代も、仏教を受け入れるには抵抗があったようだ。官僚で詩人の韓愈は、時の皇帝が仏舎利の供養に走るのを諫め、廃仏論の立場から「論仏骨表」という一文を建言したところ、左遷されてしまった。

上総の国分二寺と周辺の発掘からは、寺名や厨、経所など建物の名を墨書した土器が見ついている。漢字を操れる渡来人の陶工がいたのだろうか。また、瓦の紋様には蓮華文や唐草文などが刻印されており、平城京の文化が波及していたことが知られる。古代の技術移転の様相がおぼろげながら見えてくる。

こうして国分寺、国分尼寺の造営は規模や時期を多少違えながら、数十年のうちに全国へ及んだ。けれども律令体制が弱まり時代が移るとともに、寺の多くは廃れ、あるものは他宗派の寺院に姿を変えるなどしていった。インドでも、アショーカ王の死後、帝国は分裂し、ダルマ支配の政治は放棄されている。宗教国家の存続は古代から難しかったのだ。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)